



時代
摸画

俳家奇人談

中

中村俊定文庫
文庫 18
778
2



佛家奇人伝巻之中

中村俊定文庫



竹窓玄玄一送稿 男 蓮 庵 主 主 主 参 行

松尾桃青

案ずるに俗名基七宿庵七宿中寄北或後河内今言性山頼房の三玄性小後くおちろと云は

松尾忠左衛門ハ侍覚上種後崇何某北近臣有少一^五年有^五年

里^二て^一有^二口^一を^二立^一いで^二活^一不^二上^一り^二吟^一叟^二又^一遊^二学^一す^二る^一り^二七^一年^二寛^一

文^ノ末^つつ^て東^武に^下里^礪川^ノ水^及修^成備^夫と^有り^功

哉^後家^ノ比^難髪^一一^と風^羅切^一とい^ふ涼^川又^庵を^結ぶ^り

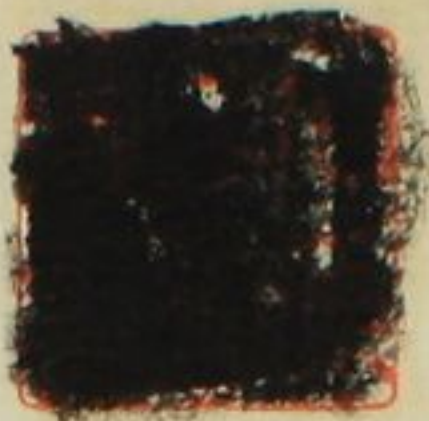
三^つろ^ろ毛^蓬を^挿く^る木^む毛^{あり}世^に舉^ぐる^る毛^蓬庵^と

稱^しに^修松^葉堂^名庵^義虫^庵初^北名^を宗^府と^いひ^り後^桃青^と

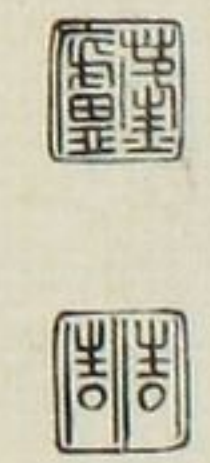
改^む又^杖子^是佛^切号^有里^素あり^学識^宏特^と

象^象飄^逸古^今小^空人^奈把^所以^而里^因禪^意哉^仏頂^老

沙^二又^一性^王画^法を^成河^許六^了好^り尚^時その^種又^依

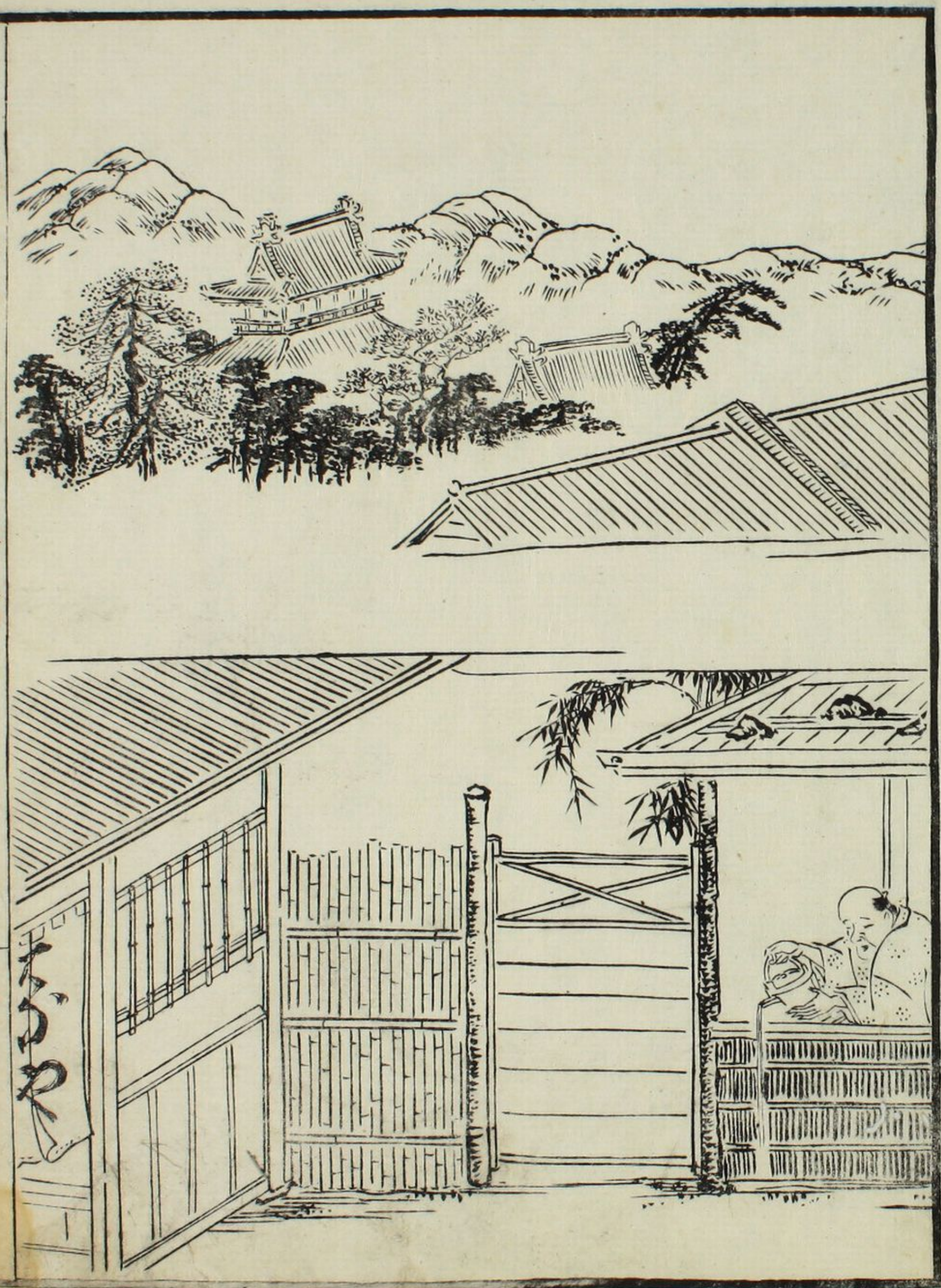


昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑
鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經
其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏
蕉翁真之脫漏而已 儀伴閑人



す家人少一とせ何の年ふり有けん石山北奥又密居
して姑く幻住庵忠尚茶院楽む貞享四年の秋鹿嶋忠尚
仍何至同く又年松玉を携て大和又遊び元禄二年首良
を翠く陸奥に旅戻同七年の秋の御侍賀又在らる浪登
振もあまの奈良の重傷をうけく赴んとて支考將侍我
侍ひ歩我進く風杜する此日刺を患令大坂市榮赤松屋
賢右衛門後室小休は病中の吟一極よ屋んで爰は枯壁をうけ
ほつる是風詠乃強方より強く七日我至く致は兼又十
有一嗚呼悲ひう赤此更をこたび江左又龍舉してあり始て
旬鐘の妙を尋ねて還り一能清をく三巻我侍奇又龍のむ
先か人我敵以は後代に當る空句正愛一たもはは結るを
後進察せしや平くた家考我危く以て三昧と存は

華真筆



大木

秋すべし一象塚の雨や西垣が取ふ北谷水東坡の西洲を
 行小舟は「田一校抄くまはる柳か彩古今此奇あり催す
 「古池や蟻とびお針水の書是ありとく玉燈が妙境紙等ふ
 流ぐり」一益村玄鐘と上程の漢菜の幽玄酒を「一本此
 下汁と給もけ久良くおそるの進ふて皮厚くは「六月
 や寄小雲並く嵐山此句句絶して濃厚三機して後を
 此旨意を知る「名月や池我同く取とすり」活の嘯也記
 して云く友人雅因は此又廣深お遊ぐ月我知る適其の
 海を感して生精深ある哉覚うこ「枯枝は鳥の止まりり
 秋此意又いそく翁若う里一附徑林中小変狂は一日是
 句我唱小友人勝狂とく「三翁をよ序りよさふ我狂もふく
 して一酒をよせ里と「何うくと因いつれちくと秋の風或を

傳ふ翁越え狂ぐ此句我狂より風の字を山に替て北枝
 示は枝いそくいまど風此字の傳を海ふい如す翁狂と因く
 我たるむるそけみ也地よ子何り送の月く興協く「一本
 落小淋和味を忘るふ元深中箱加別金城は新街を常我
 休處の砌り表亭小て一和會合何里一に空寂意山海の珠
 味を改けたり終るは後人すの後會我約せんこは菊い
 はく今和意とて有し心華此狂の云は又由ぐり「恨らくの
 風種乃結ふ一我を涼をよめる定めず或は桂末る「登
 露此爰我結ひ或は山中小一村名西を渡ぐ拙るに新る珠
 揚滋味あに風海の本意あらんやと拙しとそ他は也枝葉
 柳金等此名家我おせるとも空寂海のは名座りち係り
 よ月てふり「十六和いわづら小雲我始り空院望の作古今

伊家奇人談 卷文中

三三

此篇の存りある者なり といふ「浮城」の當座も定まり 魚の宿
平穩申寓無限悲涼宜なり 亦晋子が雄高を擧げしるや我
殊く「そま」を以て後世人に傳するに由縁なき何や
ゆく「葉竹」一樹が霜よけりとの日の出る由縁なき「若かり山」
目比高にけり「けい」のつゆはさるぬ人の言さよ「若かり山」
いふ小舎わたり「空す」はく「宵霧ら」く「虫」に「今」はり
人も年よれ初時ぬまはせし正愛つちく「流く」味いずん「何」
屋々す「更風」種「破」路「亡」一愛して「離」を「再愛」して
西漢五言と亦三愛して「歌行」雜詩と亦「四愛」して「沈」宋
律詩と成海蓋して「益我」實も「改」定實も益小和げしる也
本邦和音の習りぬといふは「又」いづく「飛」は「連」奇とい
ば「阿」もて「西海」雜波津の流といく「る」に「新」義「和」臣「み」は「藤

和撲茶ゆも似たりる「唐」和音もす「流」は「望」く亦といふ
西海法沙「流」き「海」も「か」する「海」は「此」有「厚」く「望」初「句」二句を
「歌」屋り「宗」徳「宗」長「掛」河の城は「於」く「必」出の「能」潜も「誓」句「舉」句
といふ「も」ちく「只」云「控」あり「宗」澄「奇」武「号」大「雑」波「集」飛「梅」子
句「我」撰「ぶ」といふ「も」い「ま」す「一」片の「準」繩も「立」げ「里」る「我」撰「承」
貞「徳」が「そ」こ「び」 九重より「名」を「辨」を「蒙」て「ゆ」り「そ」武「大」率
定「は」る「時」に「雅」波の「宗」因「古」風を「感」破して「新」作を「撰」起して
一時の「晒」落も「人」我「絶」倒す「む」是「我」徒「林」と稱す「翁」い「ま」す「宗」
所「た」ま「し」は「その」風「も」何「れ」んで「上」に「此」史「あ」ま「し」が「新」く「眼」を「寫」
て「次」後「集」を「撰」に「是」の「徳」が「二」百「五」十「年」の「二」百「五」十「年」の「二」百「五」十「年」
する「撰」は「尺」中「逐」く「松」津の「風」骨を「撰」里「山」家「集」に「寂」寥「我」
に「ら」り「性」く「函」玄「彦」は「人」情の「理」屈を「離」る「は」れ「は」正「風」定「小

大成して天下後世はまづ仰ぐに徳傳中興の大祖と稱譽せらるるも
宣方依りお押す此奥を及ぶ御切を依り傳の御影我成王
水子御ひ千幸榮著一大家にのくる生我成度するも
等とやいとんまふ学尚すべし一子考が為赤抄のいざり

櫻本其南

板本の母才空南と竹中東勝が子あり赤と源助とまゝ一時的神田
於玉が池は後より儒成宮の秋先生小学び医を學べ何某は
我大器私為出まを佐玄龍画成英一掃お借りて多能あり何の
以よりう意つよのく冠首より晋其南の易経の文一して宣
晋汝と米希が祝を請する此字あり一名櫻舎晋子あり雷
桓子河川とも画名菓子とり人里狂雷雲狂雨雲六病庵義我成
文合高著此諸号ありを惟くもや板一して人より拘らば

了り酒を飲ぐを礎とする成るは存りたり一或日ふふ付文
此會延ふり合をせんく苦心一ける我前生傍ら小碑研一仰き
居より云ま一妙句はありこ起りぐりまのいふ仰見銀河底と浦と
冠里公空申此令ふ金樽ありて酒樽をたのむ何と戯まむとぞ
答く金玉ありて酒をふるまきぐぬ一と生野智大器出の類あり
貞享中照降町へ居成福す彼笠が池り一嵐客とたれ回居せり
と載るも此は方り或才より一巻の鳥を巻に収まきんは
返して回く世書河中のふ初んたり我附書我著するに返るは
遊申の先を後すべしと使是能ふく書を交り和点料も
返してんやとのみ答く料は使は又收まきと返すまゝもい
まより今時人その徳もたすくを力もあくて四一一人酒
落し撥一風程我驚り一甲乙を立ると同日の夜もんや昔

生言息すくち記を連伸くとちりまがと久住き人中参りりハ
 「三味線の糸より細紀能滑り」てんころくといひまをまう記連伸
 匹一「三弦糸より細文といひてんちんころといひまをまう」ま
 こいふまど又清誓ちるえ深北百廿神明町へ移居は生記此るの
 まりもが庚申の夜家まるとに編りてん西成を返して個度ちんごま
 荷ふ作り匂子く記おしく言声ぬ唱と叫りり夜申ぬ書申度人
 俄に宅習りる生森屋まと思ひ度し後堂場町へ移居成
 清ふ教母子了り家近隣ぬ祖傳翁の家あり生時のに號「梅が香やこ
 ちるまゝ生熱ちる世句何まの集りも人ぬどもさうらの漏す
 西ちり室永口年二月春暖坐閑炉の吟とて「雪は曉空」一記ま
 しくはとるく痛小部一少ふ七日して双足世句一生は純吟
 ちる成ゆかり或はまゝまぬく種目うといふハ何やまをかり必極がけ子成傷むの端
 ちる成ゆかり

可思ハリやをすくち記を連伸くとちりまがと久住き人中参りりハ
 湯る所の文字出しく是成琴形の市ぬ取附る物ありあり
 雪小部一並り或時門人ちみぐ一載き小窓み出り目成行々
 おのりく指記指活ぬ胡麻変化申へ盛んく「まお」ちり園何ん
 ちく喰ちて持酒り種酒つづ人のぬま錢書が書僕小酒持を
 ちのりく「る」設き「目」置司作ちる像を搜し出り生るる
 益纏つちく一剛の申へ酒一並りちと或ま小記きり一奇法といふ
 辰一「一書」の作すくち氣成ぬくまとい生るるの珠も取奪す
 是ぬ愈ず生流北移りて高尚ちるゆも常小歌竹せりといふ
 水や何ぬまをほる川苔の味「照」星や横けとぬぬ山りら「こ
 ち小給」又奈海や黒本らま「照」照の面おこはや時香「秋」れ空
 屋上の松を誰まうらう「ち」松やるも孫食ふ字津の山「雪」れ

日や船院どのの顔にいろ「悪まれくおぐらめる人々の魂を
 正変をばらさるるもの」文をばらばらし「おす様う系眼前風櫃
 人凶く云ふは「能はず」云雨や家我回く「野なく俊爽又ぐ如
 「夕涼よくど男み生れりる雄枝倫存」「稲妻や竹のいふ
 為乙園ぐの澤の什是は出るに似たり「声うれて猿此齒白く家の
 月或洋すくく今令此子後夏於詩何減李王と海宋「急盛
 子て歩るく又婦り余「名月や夏みたり人小松の軽「冬来てと
 鹿鬚小ははる鳥り余生縦横自在刃月屋「史能満の松蔭
 翁と此子也一朝不可論尽去る協を後人何るひの思くらく晋子
 調異師翁と殊不知難而合者有り蓋「支考許六の知系儀備
 多くを作思を焦「奇我索むといくども意存此條「晋子
 が自放ちるに及ばげるるや遠「

服部嵐雲 附烈女

服部嵐雲の泣別小坂並村にお生に幼名久る助或云了陽天高
 久若助を此度の子におい長里て東武にお杉庄隈お小付「お阿て
 又井よおお公も勅「とて「生は「産を母といひり「一年君
 傍の信して我第小坂里井の端「家く足濯んとするに卒了
 官く祀雲り愛の障来る成尺く「武士此定で米こぐ愛く赤と
 戯まはすさみ「うまおより業成羅此本小把く山色を赤まん
 こと家志「止ぐく「成社をくは「て居宅を返の日常海衣類
 推對等よいさるると「書も手に携へは「生信れこ「一應唯一
 風雲とて小深ひ出いつ「う意つ「振ぐ「能名を治助といふ後
 嵐雲といふるの嵐此庄の言をくでりと思ひ奇情る悪さ今更
 改んもおこがは「と笑ふる度く有り妻此名を列といふるも

伊家奇人談 卷之中

出橋りて雲のくもも横に流る

流る

如考九句

鶯十六屯廿

其角

半面美人

沉香亭裡

白眉

木乃りふ徳のりかむる梅の末

梅

心ナハハツク

百花嬌語

翠蓋

墜玉簪

探荷

弄晚涼

探菖

心

九

ハ

風

に
に

大正
大正
大正
大正
大正

三
三

に
に
に
に

大正
大正
大正
大正

三
三

非
非
非
非

卷
卷
卷
卷

一

嵐雪此切なりと神寂が文に記せり初り「若原唐室と夢雲
 此神河里後了雪中庵つ小不白彩玄峯雲と号せり」の得羅
 雪千山を埋む什麼孤峯不白あるといひは清くよなること常
 に激雲才丈へ急す昇初り抄ありはく才丈へ申し入る時
 沙同て云く玄春望別送乙片語今秋归来相見了也即今地何是
 行脚眼と答て云く觀音境裡古案樹沙いはく案無古今色作麼
 生無古今色の一句割進ぐ云く春色無高下花枝自短長沙是
 を答て休玄と香釋して冬案杖返記玄師と答り「可第」地
 後河り空妻唐猫を巻する子法よるより香法てそれ融成
 巻すはくも種ありはく一人るに増する愛物器物いむべき日
 小も生看杖喰すはくまごまごといひて思てと此を改はり
 或日書此他形我幸ひ溜り「猫を巻す可ま」り日書よ返り

東く官ふ割る法は才を知らはと答ふ妻泣叫く「慈慕ふ
 小と切なり」猫の妻いりある君此奪ひはかこちつ、ん地
 悪くちまぬ隣女をとり小生作杖告く猫の形先を信る
 妻大り「恨く交ぬ教いとみ争ふつ人打寄法させて割
 分杖和らまこりや睦月はド免の交ぬいりひを人く又
 笑れてと端出「三」恨ぶ杖石よやを月取此玉をどねとハ此
 時若る子小そ有り日つとせ重陽の詠り「芙蓉白菊その
 分此名いふくもぐ友晋子深く感して我生涯兼此句是
 及むは己と生より己よ兼此兼杖は心若何生は沙の必兼や
 此詠と此句ありかを憑は至し「三」ありを名作老成沙翁
 集申小置とも亦何と分んや「元月や睦て夜の物ぐり至
 不言祝賀還在其中」浦園若く寐くも姿や东山壁言喻の

句雅一此什温厚和平实小平安の素な依り家「君不さや
 手いさくそ筆此桶足見其莫逆」世依一亦能身へ瘦しけり作
 至獨活「意は風うらく来て吹き赤河此泡」竹の子や思は園と
 起の美起「梅一輪一主人程の陵くは」沢深のふさうとる黒
 う家「初秋はれ勃きぬ纏すどれ皆以く足見其正風」其際
 年山依井戸小宅を来く久く恒せり時一室永は年十月
 及以兼又十有四辞世「禁ち依咄一禁ちる風此上為と用
 取の鳥市いつ人園竹又授け園竹是哉吏登又傳よ後世去の下
 風了浴する者亦多し主徳すこ大あふはや

向井玄来

向井平次宿へ前の抱抄は人幼あり名又後く洛陽に居り
 往年蕉門ふのく玄来と能名すそ風松雷申と並そ玄来

筆ふ屋一蓋一尚村莫以病の魁あり一尊形山侍く故く
 小总矢と下「勃とも又えで細く男うか」神叶来ぬ和家
 れを撞ちり「玉柳の奥奈つう」や秋の歌「尾限の公えお能
 海嵐うか「荒磯や走里別多る友子鳥沙翁死して後抄哉
 作く以て生流依里生性者深切ある皆人の知る所あり
 其舎を屋材と名く「御記風伝又其舎を録書して回く
 一我家此能遊に遊ぶ屋一昔の理屋をいふづり
 一稻夕うこく精を哉思ふづり一魚を我忌みのあふは
 一迷り「灰吹をすい屋一烟草を嫌ふふろ何ぞす
 一隣の家借哉はづり一火此用ゆる一ハあ良は
 いそ風依りて可笑一支考が後日記よの玄来小烟管哉
 掃除するの癖あり又此を好まは隣者借借といふるあり

是より此屋敷を此と平といへる者少く食する代送りなる所
 里の時一室永元年九月外に菅根の許へその儀を作
 曰く暇ありし一何あり活し居す弓矢我控て十五連と終
 ちの二十五年先此と合へ三十年末大徳士映何の法ありり
 先妙慈尊又思く風種此名ふ言ふり京妙小如ありて諸
 子の院一産す南無名氣を押へ東北此風我獲す累
 此阿正風体の眼を管地「湖」水まはせり五月雨とや後葉
 の櫻を蒙く不易流形の巻成分ち後核の彩風は陰でも終
 幽玄若細みと忘まは「本」枯の地とも居片ぬ時あり赤子祝
 や雲雀の十文字と申り又何水の伴秋一や「雲」踏や寝
 小も獨り月此宿三詠して先妙此年を驚りし月賞歌の才一
 古中の飛送にい極里たけり一代の飛送と一友句持る人

はく稱あはる一此を妙といひ改一殺句に及べり二十餘年
 彩水の辺つり全暖味若落材舎と妙をむり人石山の幻怪
 唐と考を付ふんざ一深くをこを雅波の愛我史て産
 艇を解起義伸奇此蘇も肩衣小潮澁を携ふ死後の
 博成堅く守里諸生我ちつけ初人を投く越の流伝
 智く有波理波の虫を選一嗚此卯七我助一渡るを佳
 むけ我大狂一力我よせく文選序者れ一人進み病
 床不却てと三夜旬他の虫を家へ何ある蕉つ滅亡者
 月日や何里りん去年のあ申紙の院家夢ト玉ひぬ
 今年衣交若文系卒す秋九月この郎去くも花足も
 ぎ此思ひをけせく人若揚我影るるや「果」又支考り活
 材先生の操奇何り慈一暗

借史草

借史草々々先代々々尾陽大山の幸は方り知り学我好く倭
 漢を究む好く心々々徒母心はく孝んたる才を生る所をれ
 は或成ゆつりくそをを慰む嘗て右の指心痴つけ刀此柄握て難
 しと酒り壯年我我様しと福を家とらる時のは號多年負屋
 一蠅牛化做蛇踰得自由火宅最惶涎沫不偶尋波雨入林紅白の涼風
 了きゆる我我れ有るふつ法華経を讀誦するより他るが
 しとつふ何なるはよる意門とせんく時く與我併みす「我るそ
 波瀾此述し「拓芳く家「啄木をや「拓木我様は「吾名申「醒靈
 毛少く「仮此世の極之極く家「有明く「振向ぐ「此室く家「美
 々々く「衣の衣もちり重りり「隨言句をその作む可成室水
 え年二月十四二歳して此世我々吾吾人玄来縁縁作く

曰く今茲如月来此日月の神意は残る物く「祥沙守はら
 里ぬと「湖南の正秀が許より知り是より白ぬ「雅ふはらぐ「里洞
 止免く「縁ぬ津々く「そけ人たむむく「我思ふは「尾張の函
 生れ在「山侯に仕くく「常徳其名も有く「ころや一日「吾意
 一人を信く「竊く「君父の家我思ひ出送の傍ふ「疑ねく
 きり「雲滯り引替らぬる中「累「洛志史邦又ゆり「五兩亭
 に「仮「竊く「先代「心身く「神らぬく「あり二「吾此「故「悠の中
 小石を折く「並ぐ「口百の火燭の上と「面我はく「向て「吟「舎れ
 同く「此人を「録に「先代「妙妙云ふ「付「借是「道に「進み「学ば
 人焉と「よまんる「月我「然「居り「は「と「此と「あ人り「ま下「地
 の「艶「起る「り「美「法「む「だく「性「善「み「学「ぶる「我「は「ま「ま
 感有りて吟「人あやうく「修す「若く「ける「お「忘「くる「ぐ「如

伊家奇人談

卷之中

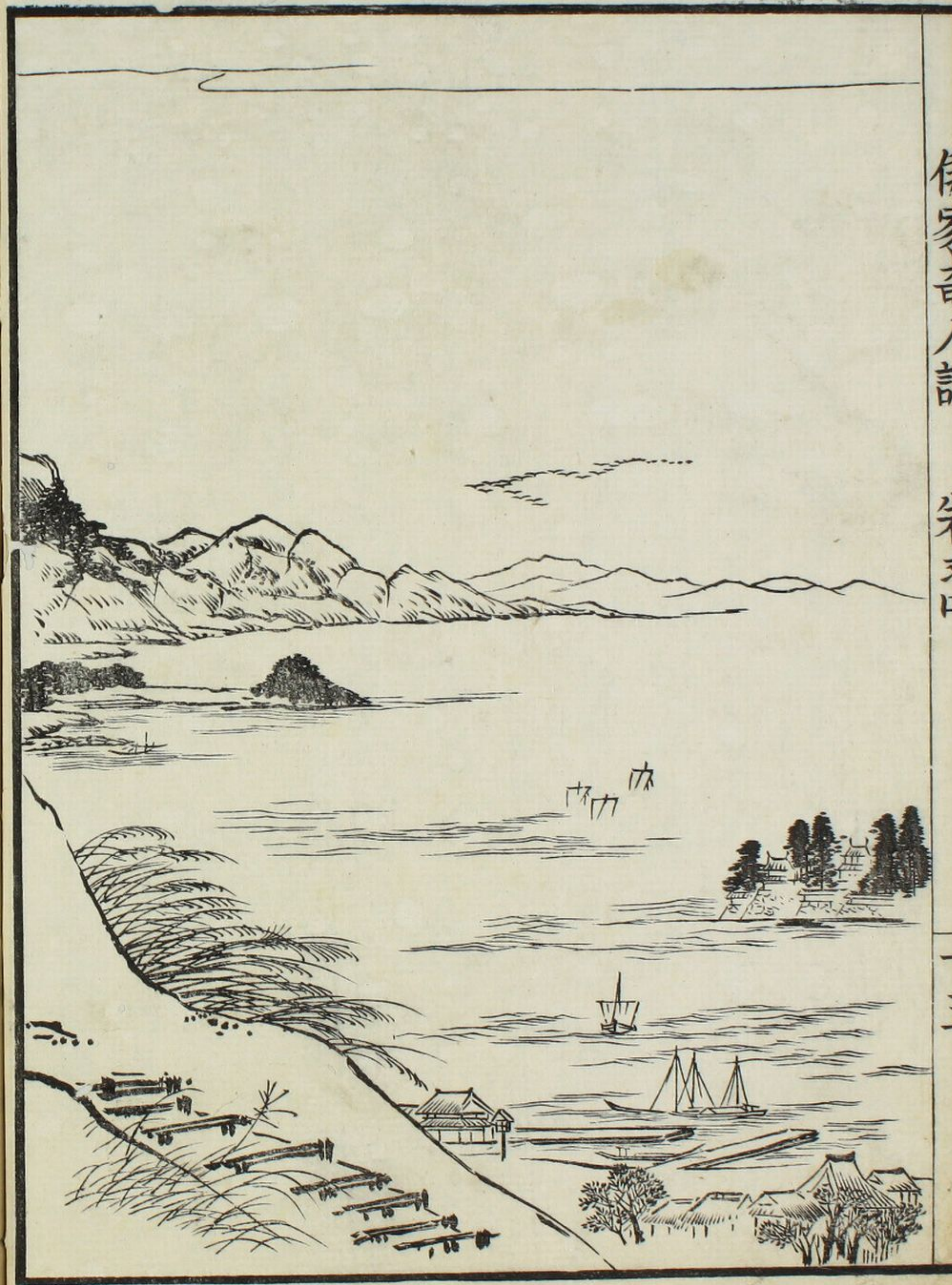
十三

先沙津川の海里のふらまはるの句ども出集め候なり世
 うち「大系や標北おく候ふ擬月ちまといへる句あり内三つ
 入候し「小風程の厚く上進さるまゝ我陣」け信ちあひ
 一「このくごを我くく一「あつ人ちり又新波の病床例」
 信成者どもに伽の髪句をすく免今日より我死後此句あ
 る「一」一字あお信成加ふ「く」はとけとほひりれ「或ハ
 吹飯より鶴を振んとおろし「此京物よりけく「壽を盡く
 或と吐き」次「此百おあるに便な死思ひふま自れ又々
 病人の餘里す「協やとむ川す」新「我」一「り」の
 娘「く」巨「答」茶「一」尺「居」り「唯」く「ら」あ「る」茶「落」ち「下」の
 室「は」ら「あ」と「い」へ「る」一「句」け「み」ど「交」手「出」来「り」り「こ」を「感」ド
 む「ひ」り「る」實「り」一「新」法「形」ふ「い」か「く」信「成」て「を」勤「う」ぬ「興」つ「我

探り作候求る此暇あり「この空樹小木を思ひ知候り
 けれ先沙津辻世の後も猶所松本のをれり「ま」み「あ」ら
 新く「義」仲「寺」持「う」人の山「又」茶「席」を「結」び「ら」れば「按」す「る」に「形」子
 家と不慮するがぬく「信」の「沙」名「お」も「う」げ「と」去「し」申「さ」れ「る」或「信」り「け」ら
 而「や」信「成」り「か」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」
 て「世」上「の」因「り」成「候」る「と」も「抽」丁「を」沙「海」の「平」生「ま」あ「つ」て「去」来「時」時「内」自
 文「章」何「り」ま「ま」さ「け」り「く」お「も」ろ「れ」く「も」信「成」る「信」成「り」の「名」あ「る」ま「ま」さ「け」り「く」
 啓「曲」曲「水」相「逢」ち「ま」ご「抄」吟「じ」或「ハ」杖「を」携「へ」る「落」材「舎」を「叩」い「く
 「飛」らん「ど」信「り」於「の」松「鮎」も「信」り「け」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」
 下「脚」下「登」湖「水」指「頭」花「洛」山「と」眺「望」金「枝」信「成」に「一」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」
 け「ん」々「山」を「下」ら「げ」信「成」の「誓」何「り」予「ハ」世「小」た「ぐ」す「め」此「後」あ
 り「て」久「く」遠「坂」を「登」り「あ」の「中」に「居」る「信」成「り」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」
 登「月」一「夜」の「茶」枝「倚」み「茶」席「又」着「く」一「字」記「名」や「思」つ「く」れ「ハ
 山「は」く「と」申「く」今「宵」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」信「成」り「信」成「り」



結真
三



斜あらしに文りまゝ小雷鳴地よむに吹風廊をはあちけ
 水の虚空欲琴閑是空満山雷雨震寒更と奥トおられ笑ひ
 照して子息ぬ身好く我啼く〜巨う家と笑え〜雪染れ空
 色再を彩るぐり今むち〜記名好み残里ら白九十年の笑
 の三年此帳不化〜雪指るる年若然を生す惜ても程
 ち〜此一句我手向〜来〜と涙流成徳坐信る好〜志記
 名きく妻や三年の生ゆれ

森川洋六

森川洋六は江州彦根城此士一名百仲字羽菅師と云阿松と自稱
 了居我五老并と号にまき井小四徳河り〜草字藤程已池二
 小揚揮豆あり毛総觸三よ雲花雲〜波持波四〜紫芝岡許は身そ風雅の嫗あ
 るもの李田が文〜知るる人と成り敏達〜〜融るる小長ざり

又画成能す意存も画と云く沙とち〜一能傍ハ我と才子と
 奈はと出けり生殺句ま〜母せり一本箱〜成屋記桐も若
 芽うか〜今夕宿の妻此坊橋や帆ヶけ船一口八月のお波さ浪や子
 観一竿と死装束や古用平〜看鏡此万を招致哀感り哉一欄
 杆ぬ兜るや業此乾法沙一初霜や治承江戸若人公一嫁入のつ
 色るり津ぬ〜在沙翁双後〜此送愛の櫻樹を伐〜肯信我
 刻み是我大津の替月尼〜猶る生文ふいそ〜

法床愛言せ〜持手はせ〜目お交存の拙者〜いまこ
 すと此と云けたに像も皮延引け〜度翁も手小婦れら且云
 さま井此古本〜刻みす〜いらせ〜兼て大也〜像刻〜度金
 ヲが〜下〜も初染あ〜く〜竹む〜く〜人〜又〜は〜意中〜いふ〜使
 十月三日 兼の後像〜流屋に染もた〜 洋六

智月尼様

生恩遇の源記を志まはるる事初此如く惜むる事晩年痲瘡
 重くして人小面する事あり適道成道人と存取束る人何れ
 とも屏風を志記すく遠く成許は後一年金塔の刺子い
 と川で對面せん事成れむむいりて屏風成障んやと病床
 迎へて飲酒おれよぶる教刻磨りけ居く臭氣芳くたり刺
 子ちりく事て研研ちりく研りてく體至合るは是バ病何ん
 事す一忍を子小徳も一一度刺子小お見えそ露も體を
 風雅と稱すの大丈夫ちりりて樹人伴し合体こそ正確又年
 小死後後寫の場す一時打破屎糞壺芬々臭氣供梵天下
 死ぬる事そと思ひし事も死ぬる屎上事なり此子終身
 已むが女代句後して化を皆蕩物と思ひあり平生の

後中一ト話を記く入るもの我れみ友里こそ言ふ事なり彭老後
 まで膚摸おれ目逃りけりい他家此一奇物と稱すべし

東益村支考

支考と名流おれ人は一々後若小のく結露といふ事ハ弱
 魁の流なり吹毛羽世春三月彭揚牡丹花下風といつる場成作て
 字つ此言借り末程も安れもする東村武寺の大舎小頭嚴志
 溝よりハケ條の前後成能同に成り法春生を妙み逆り
 後機を控きたるころや嘗て勢陽山田より身成置り何れ
 風家に親み交る時より流着るの才成情之能借を翻く蕉つ
 入りむ功成く阪口すといふ見龍といふ醫又隠るく此名白狂道
 二と仮又仮る所よりて及るなる事三峯の鼻小去る事
 と梅屋松名祿あり坊号成東華西華と唱るハ何れ一遺道

伊家奇人談

卷文中

十七

十條の僧より班の不在に懸子と嘆ぶ家又在ときい獅子老
 人とのふ支考といふるハ舊名ありて字二教に涉りたり又文成
 以く句及す著す所十海古今抄等編ありて確編ありて發
 句と針てハ亦と洋ハ魯衛と政身「序枝」肺や加よひて梅也
 灌仏や目出さるるハ古はあり「惟子の形」安「淺」百「牛」何
 声小晴「月」夕「糸」惠んすよなきハ世で綱代身はドめけ子僧形
 我智す傍律をきて居る里るハ「夜」洋を解の公記する時
 國此禁小使すれハ金利ハ申込肉食などの校體も有りて感
 法例いす「免」く懷陸「陸」をハ事せりちるハ牛とあるハ「と
 い」つ々に答く「牛」ハちる合点ぢや「招」席夕す「み」一「年」尾の「巴
 靜」と併「歩」ハ「肉」るこそ「素」名此「波」ハ「舟」ハ「棄」る「り」ぬ「は」ハ「も」去
 此「尖」を「去」せぬといふと「額」ちるハ「班」乃「字」洋「美」ハ「量」數「茶」ハ「多」く「ご」り

雲雀の妙唱するを「か」り「く」洋「く」たる「海」上「も」喜「ぶ」事「な
 ん」ほぬき「繪」や「も」及「ぶ」ぬ風「宗」たり「靜」材「此」脊「中」代「叩」い「く
 一」句「何」る「は」ハ「や」と「答」ふ「答」て「回」く「古」人も「素」小「達」て「を」嘔「す」る
 とい「つ」り「初」十「分」ちる「変」ゆ「く」ハ「句」按「此」登「す」係「物」ハ「何」る「は
 今」何「才」ハ「素」也「も」者「里」し「る」時「を」出「の」足「燈」ハ「添」ず「く」
 二「實」小「道」成「は」る「人」ハ「控」中「を」あ「り」と「靜」も「感」ハ「て」は「生
 閑」た「里」し「り」や「候」年「は」と「在」ま「る」ハ「海」り「く」遠「く」「天」年「代」後
 る「阿」小「尚」川「く」生「風」を「慕」ふ「者」多「く」後「世」連「綿」り「て」流「石
 一」派「成」唱「は」る「是」や「く」此「老」が「徳」ち「る」ず「や」

曲翠子 附幻恒老人

曲翠 賦と曲ハ江物撰詩のまゝ馬指堂と号は知れより蕉つ
 小遊ハ生老手と稱せらるる一念入てをうらるる蒼む山茶ふ思ふ

夏夜泊つゝ居るり蟾蜍「了可る声」枯野の嵐うそ或年了
 深川菖菖居此此は是は此中へ「菖菖」小沼河らひ一沼や此れ後
 ら此回執首我氏也日君君寵を以てより上中登壇一して
 此らげるるも重里藤中多くと此らるる一苦めら此
 る什つ此れ我家へすう一入息悲復我者く殺害一を身
 公ま月う小句殺してぐり風流此名を知るれども忠誠の志は
 れより身を事破流は和方流能一且菖菖菖の名手方り破流は再
 照といふ句をさるる菖菖此名小附一と貞操名も歎きたり
 此は了全雅方る夏夜知る流流様も此の如く名家と稱
 一川に

惟徳村

惟徳村の流あり人素氣有を重一うとも後をどかす一嘗
 て蕪門又遺遺して惟徳の狂若と惟依風雅をいふ人狂狂して
 器に生流破生菖菖小風雨流流と惟く此の吟あり
 「水香やむふ此者く津ういつい」長ぞや若根若松風雲の
 らや「春山のはあのをあく」小妻う赤「時取けり走入りり
 晴みりり途中春夜根をさるる件六に絶り我とく曰く吾
 子題すべし件六出水我強一春山此句を寄置つて
 天物集と名けたり其後の夏夜里り會集り「安んずる句
 「名と利との二川三つあり」梅菖松「梅の如河ういのあいと
 あうみののを投遠虚世のの屋一一年西風形梅の時梅
 歴あつて小志るる「あまき」立家あつるりえより狂僧此留ひ
 根を結び肩杖綴らるる字物を字小候たり其の中の至を

乃く布一疋をよぬ村よりよんでお伊紀或旅宿に珠く布
 成おし着物と日月継くあへ残る債ふよんといふよぬ
 いそ紀継ききせぬ村登り出り白う立席く云く秋ま
 相若懸しそ衣り人されよと垢附くる古物を着る人
 又ずして去にりり又美濃國經此村あり宿あり宿より立
 逆次妻を運くいそと産家の飾を収め小社河ま衣柳
 小掛並り下めおとく超く思るに宿宿には屋おけ衣柳
 此振袖を日月失り柳の彼村の塗へ宿よまよと衣の形と
 告ぐ立席く怪物村人着物する小器此若く何は衣了と何
 らんと去るべ此くく宿屋里りるに果して衣衣衣衣衣衣衣
 りるの今お早り立出く宿又推風身小のく凌ぐく軍衣
 立席く男女此ゆるゆる受ぬと是くや何んといひ違推風の

振袖成候く返したるさうりや又何まの玉くや存り登姑く飯
 居此此久く打籠りく河里り日を或人今宵他家小能借何り
 いづくせむ人と勸めける村お答を我目おく超は月入て休量
 契茶珍飯宿で何恒産印みお能借あり能る成かへ能借
 せよこま何更どうやと答へしり殊よ人我とも志まへる隠者
 己ハ此借れりる能は能

勾空

勾空と加別卯辰山り閑居く柳陰影と号は常小能波何り
 て意算成ゆと学ぶあへる沙幕も空深志を感ドていつとみ
 浴く義仲寺ゆせ子此おへる兼好此画賛して秋の色糖味唱
 盡もちりりり己八残されぬ此ゆを信能事小再我捨人を深き
 此言思を拂お捨く糞法能と何も持帰さきとくくるん我

元王秋葉零落此言我速多倚たり初め蘇六枝柳陰影を
 痛の名我休くいと賸くうこらひ「愛る柳何る」も我も陸を
 ちがご涙してま出らる一年元がに号「履雪を房の樹よりちりまたり
 「折角を蘇」ぐせよ月此雨又或時「梅が香や分る」里を牛此角
 といつる名句も何とぞ

秋の切 附 李東

秋の坊と金峰小名言は風依名隠士より「凍つ紀と凍つきふが
 笠此風ちといつる香涙もあま」或時妙子湖南の幻燈屋より「付
 ひ寄」小沙翁の「我高々故高小」記を馳走りふこと一夜二夜の
 飯齋を許けま「が材も適此身ちればとて世は迅速の
 いと懇ろ」物陰王「麓海を尺送り」屋がて死ぬ氣色八尺之足
 此声と一勺の養液の立おまぬ夜に「飯まく交遊の中にも如枝

神「時あり」や「何」も物陰王の筆ありと姑く申は「乞
 乞え」る蘇水金杉柳の足代屋すぬ如枝等も「對面何と」又例
 此中ちれむ妙子「を海ばかりも昔は」を坊で「蘇の寓舎
 一泊り」して「強自強士」と合念すれども如枝と云ずは「梅で懐
 氣色もまう里」ハ牌張りと「氣色」あり「暗感」に「け」る
 又「蘇」より「海」の「道」を「屋」へ「本末」を「す」る「小」三衣「一」神「あか
 空」に「氣」を「凌」ぐ「足」を「段」ち「固」く「菊」子「此」許「人」を「度」を「乞」と「一」言「け
 れ」バ「由」より「下」代「能」ふ「了」物「打」荷「ふ」人「を」惡「き」菊「子」も「一」言「せ
 け」ま「由」より「下」代「能」ふ「了」ぬ「物」を「ち」荷「ふ」人「を」了「と」を「危」れ「と」く「炭
 我」宿「里」を「一」つ「嘗」て「い」ふ「風」人「を」實「り」清「雪」を「も」屋「一」死「後」
 米「淡」ち「も」多「く」残「り」ハ「尺」日「め」も「養」に「申」し「ける」を「終」焉「之」正
 月「日」ち「り」兩「友」李「在」此「以來」王「孫」白「物」陰「る」る「を」於「此」也「切」田「回」く

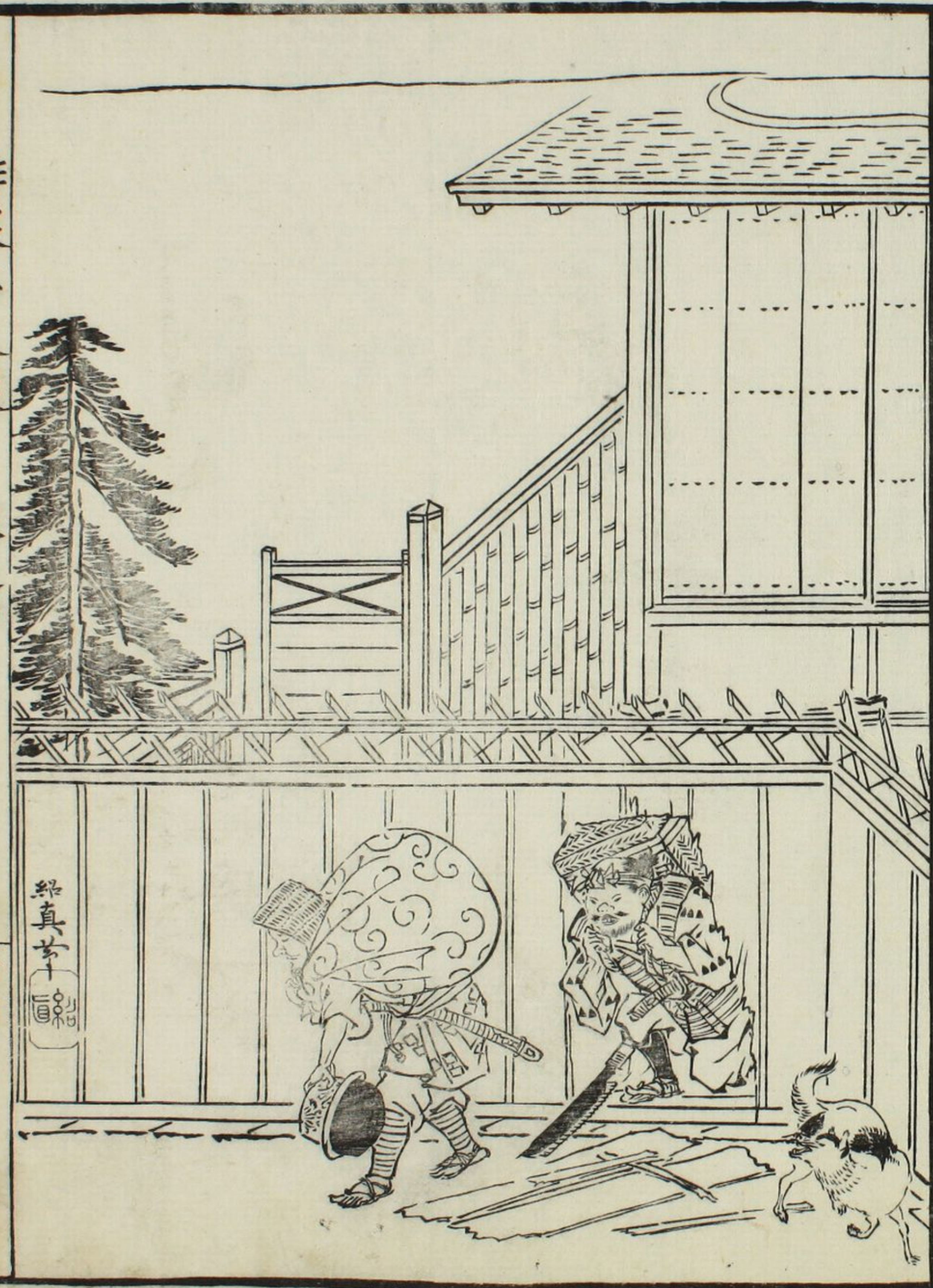
我曆作まりては、こころ「正月、あつ方より、あつ世に、あつふより、あつ口を、あつびうと、あつ入し、あつく、あつつ、あつむ、あつい、あつく、あつ息、あつあ、あつえ、あつり、あつ李、あつ東、あつ醫、あつ死、あつか、あつら、あつも、あつ生、あつ身、あつ已、あつを、あつ忘、あつま、あつる、あつも、あつ志、あつす、あつる、あつ多、あつう、あつと、あつ感、あつ涙、あつを、あつ海、あつせ、あつた、あつら、あつ「あつ稻、あつつ、あつむ、あつと、あつア、あつせ、あつく、あつ失、あつり、あつ秋、あつの、あつ村、あつと、あつ一、あつ句、あつ我、あつ手、あつ向、あつく、あつか、あつと、あつ此、あつ如、あつく、あつ葬、あつア、あつと、あつり、あつや、あつ

李東の金樽めく、あつ十、あつ村、あつを、あつ解、あつく、あつ大、あつに、あつ段、あつを、あつ靴、あつむ、あつた、あつら、あつ「あつ能、あつ借、あつ此、あつ難、あつ等、あつ此、あつ高、あつ尚、あつの、あつ遊、あつぶ、あつ殊、あつち、あつる、あつく、あつか、あつ古、あつ人、あつも、あつ宿、あつを、あつ俗、あつ物、あつを、あつ中、あつと、あつい、あつく、あつら、あつ如、あつく、あつ上、あつか、あつを、あつ内、あつ人、あつの、あつふ、あつ風、あつ味、あつより、あつた、あつれ、あつら、あつら、あつ宿、あつ人、あつと、あつ「あつ忌、あつれ、あつら、あつり、あつ遊、あつぶ、あつは、あつつ、あつ冠、あつを、あつ掛、あつま、あつと、あつて、あつ「あつ宿、あつも、あつ江、あつが、あつ急、あつち、あつり、あつ露、あつの、あつ着、あつと、あつ言、あつ声、あつ小、あつ吟、あつと、あつて、あつ出、あつぬ、あつ津、あつと、あつ心、あつ中、あつ堅、あつ固、あつの、あつ物、あつ今、あつつ、あつふ、あつと、あつり、あつ

磨工北校

此校の金樽名磨工、あつと、あつ「あつ牧、あつ亭、あつが、あつ才、あつち、あつり、あつ意、あつ存、あつる、あつの、あつ能、あつ才、あつ感、あつて、あつ

物才の逸士と称し「夕風、あつ何、あつ吹、あつ何、あつげ、あつく、あつ繼、あつ月、あつ「あつ去、あつ厚、あつ一、あつや、あつ幕、あつ我、あつある、あつ一、あつバ、あつ様、あつ道、あつ「あつ來、あつる、あつ秋、あつ之、あつ風、あつば、あつう、あつ空、あつで、あつと、あつち、あつり、あつ空、あつたり、あつ「あつ竹、あつ森、あつ酒、あつ小、あつ碧、あつか、あつや、あつ露、あつ時、あつあ、あつと、あつ此、あつ作、あつを、あつ去、あつ處、あつ此、あつ室、あつと、あつも、あつ入、あつる、あつ一、あつ初、あつ免、あつ生、あつ友、あつ如、あつ柳、あつ影、あつ我、あつ奈、あつら、あつく、あつ酒、あつを、あつ鬻、あつく、あつ校、あつ素、あつより、あつ嗜、あつむ、あつあり、あつ日、あつお、あつと、あつに、あつけ、あつく、あつ阮、あつ籍、あつが、あつ壺、あつ空、あつと、あつ「あつ甬、あつ匐、あつ此、あつ風、あつ味、あつを、あつ尋、あつと、あつ一、あつたり、あつ日、あつく、あつ夜、あつく、あつの、あつ変、あつち、あつれ、あつた、あつ柳、あつも、あつす、あつま、あつ一、あつハ、あつ倦、あつある、あつ氣、あつ色、あつを、あつれ、あつけ、あつけ、あつ後、あつく、あつ云、あつ家、あつは、あつ足、あつ才、あつ役、あつも、あつち、あつ一、あつ申、あつ復、あつ若、あつ比、あつ奈、あつも、あつら、あつら、あつ校、あつ訊、あつと、あつそ、あつ此、あつ下、あつめ、あつり、あつ種、あつ味、あつ嗜、あつや、あつ何、あつる、あつと、あつ存、あつり、あつる、あつに、あつ下、あつめ、あつも、あつ酒、あつれ、あつる、あつと、あつ合、あつ鳥、あつ一、あつて、あつ是、あつち、あつと、あつ答、あつふ、あつ校、あつい、あつと、あつく、あつ是、あつち、あつく、あつば、あつ一、あつ杯、あつは、あつむ、あつと、あつ柳、あつ根、あつを、あつ切、あつと、あつ一、あつと、あつ大、あつ第、あつ一、あつ種、あつ一、あつ酒、あつ杯、あつ我、あつ伴、あつ一、あつけ、あつ酒、あつと、あつち、あつり、あつ空、あつ時、あつ校、あつが、あつ号、あつ「あつ雙、あつ酒、あつや、あつ我、あつと、あつ乘、あつあ、あつ此、あつ火、あつの、あつ車、あつ或、あつ夜、あつ校、あつが、あつ家、あつり、あつ能、あつ借、あつ何、あつり、あつ三、あつ更、あつの、あつ比、あつ偷、あつ見、あつ入、あつり、あつ知、あつる、あつ人、あつあ、あつ月、あつと、あつ秋、あつと、あつ告、あつく、あつ校、あつ



紹真十
圖



打ちあけ何れ様持ゆと出だしと戯りて居ぬ里よりあり
 諸人みお靜しとく生席を出りきた時又「世百吐しふ葉が
 浦ちんくといふお句おたり枝を河へず」盗人の目お掛らる
 免でた由よこも附くりえ藩年間金城燔失北患河をく房
 舎をふらばる腫腫とを依枝が家も累火をり夜をち多く付
 束系答へ「燔ふりけはさども急之を渡してて自若り
 された世更飛る河の石を能弁つとる風士ふまると時
 人感一うると後始とくび火流く連るお後吾人先り束王
 むりこれ氣情いりてとて「法ともお忍と等もすみと成る烟若
 申ぬ一句作麼生枝あこく」法もに忍も等もすみとちり
 生よこの世をさうくおどちり起る變も清静の忘れるそや
 此時一お忍と舞といひ集お来りて申す「燔ふりけれども

櫻けりぬうち支考「梅が香やは川一裏」燈火存牧童「空
 ひはも笠をく笠れ小屋の屋根北枝又雪清お掛りて
 「杖提の祝儀にふらす水籠うお枝」曇りてすれど抑れ急
 時後「板敷る人の笠きて杖寄く支考聊武庫の門人従者病
 り在る日夜浦りりたる夜を空とて枝をやみもたなく付ひ
 けり起湯粥の世法やでもおたるとる鬼角する中疾篤く
 治療術をとりておとて文おゆりは割ぐ命終まるとお何を
 して走りゆり強家よしくを推我叩き後吾く我を捨てと
 ばりり生法を大声おを泣いどりり扱しと妙極ち絶えらるハ
 別れ「遠く縁とるおありと初めお後り」縁もあ合く感
 たらとちやけきを平生此交王思ひ厚くれとちつり

偽流化

僧流仕と云ふ主一如大僧正の蓮枝山にて戒中并波瑠那奇
 此位獄あり一年慈養此推信をまてふく或は云ふ
 落材舎小て雲面一と沙才の石堂我波む此よりを其南
 砥波山集りも此志の免でとく名をぬきを予と一と又思ひ
 ぬる中我給すと記せり生一此れ何れめて必廟集と云
 一分入を鼻齋此声や雄上川一半子の身みもあて時ぬり家
 一書法や松一掛小虫の小口之深十六年壯氣して夜に
 鳴呼ましといふ

僧千那

伴少千那と江為隈田本福寺の十二世一と法名我成或上人
 との常くく山くく爾養材と号し生性智悟敏達寺一と
 此遊禁と稱さく一遊坂のうと南るはや初櫻一持れく此遊

形や梅柳一言灯籠をるハ物う籠く家享條八年一寂は七十
 有三葉あり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能して画と細子亦長せり能名宗
 字はトめ齋言又従ひ後意門小遊ふ葉若う里一附の句に
 妻ふもと成人わりの小襦袢空身枚蕩一と一秋後小味れ亡
 命するもり教度或附本骨れ山申又は由よひ入里荷るづ此方
 ちく形跡小倒ま体一衣被る破鼻く取小を行れ子登ま
 妙ぶ里身一と糸登一枚被はとい食小を饑たりれバ乞食も
 形とちられぬ按内子うかと吟して名我破笠と改らるるあり
 空より江戸へ帰く晋子小寄富虚栗集よ乞食もの句何れく
 するはと年久一とり天和三年あり後志家きりて津軽あく百

食掃まじり延享四年二十餘年して死するなり

落通

落通之何れ所の人あるはと我知るは若くは一に叔父の何より
既し人あり小舟より一我為舟遊に舟師の時道は傍らより物
いひふ骨風海の浪ぬ及ぶ幼たより好み一掃形すればとて一
此舟我麻へ出て着ぬ豈に虫も穢くはして一落とるる落世
を旅の舟をばい川もまた舟をあらはし一舟駛して曰く我い
まだ君家へ津く一時活の季吟の奇拙を仰記後傳者た
傍より小舟ハ船師のみどりく知れ遊ぐ生涯は楽みとては我
小後く東より一と沙才の隣ふくくをより海西の名をば何こ
ら至るる一山椒の幸く皮をぐはせよ一いぬくと人いふれ
年此言少え流り舟を渡すて出立つて一國小を川や海に

此秋北志へ遠ふる何れと姑く沙才若中流より流れ
とも舟後馬の流と又生罪を許けり此舟蕉舟舟師
画がみづより出協所をり流るに或出小義仲寺にて亡沙遊
俾の時此子大津の使者我傍を生席を好ぐといひ又侍
舟れ鬼妻同んくく何れぬ邪曲をせしと記さるる大いなる
誤聖より舟より猪取の曲水へ迷す又虫も色
落通より大坂へく還俗い多したるとのる舟をんけり三
年以ふより尺く来る夏ゆく今又驚く舟定ら流とて
別り徳園の言似を感すくいへる平生此人をして常
此人が若るる我方流し何の不審り存なくや拙者
控くふ画仕るはどくは俗よ素直にても風狂の助けも
ちりいそんむり一の食よりハ猪取可中の

二月十八日

曲水橋

おせ銭

猶風尼

伴賀別と野々一猶風尼といひるいふ河風妻が女一して同歳
 交回氏へ嫁するといふ交死して後難頼み一能清を以て
 三に蕙門北と手なり生秀流と名え一の名月やちこれて
 後りる極ば一ら生瀧忠句我撫々本禁集と名く世は
 ず惜む屋一菊いまだお口ふ去く忠たつとま一時衣振
 世治ふど交らまらうとや後年深川の席人使して能清社
 といふ物を借りたり文意はを記置き極め已制せし物教
 小て右の肩一可なりまみどり抱振あり東痛子一は
 生風家おと歎奈一たどい

智月尼 附乙別

智月尼と江州大津郡志人乙別が母なり親子とも風雅を
 志すんが蕙花我沙と名一年乙別が東行する我送ると
 「わげとさ人入ふゆく旅を不ふ二此寄嵐茶を憐あはく「嗚なお
 米お母一けり猶すいぬ「吾わが一子え屋す免を協一本を
 れで丁いを命惜いのちをちま様学身ち老衰をりこちく「我形わががたも
 小入ゆる栞しり形かたふ智月一海山の音な鳴なき日る雪吹ゆきうか「昼ひるの
 昼ひるする此こ夜よまはる冬ふゆままる乙別晩年此尼沙いふむ川がへ
 筆ふで残のこへま子この袖そでりあ合あせせく我わが一形かた尺さと成なるる物もの出でる
 残のこ一玉たまくとまままむむ菊きく臨りん古こくもも六む十じ一し小こちちりり記し尼に小こ形か尺さ
 子こをを乞こままいいとと力ちからちちとと戯あそれれふふらら出でてて笑わらへへとと奈なままをを乞こ
 沙さのの形かたをを何なにららししめめ計けいをを知しりりやや浪なみををりりそのその愛あい

哉新来りも今年此よりふり

経歴松風

経歴松風と江戸村人その身きよ家やうにてすたるあ里といいんども
 生涯い身ろ龍りゆう身の憂うれ何な里り一い鬼おに仙せん風ふうとなるも一い蕉せうつの遊あそぶの窟くわ歩ほこ
 号なす一柳やなぎ灯あかり此こゝに在るに後のち一い松まつ字なづからりとは按おさ神かみのあ齒はやあ秋あきの
 風かぜ一い舞まやあ目めくの益えき此こゝ出で来き一い昔むかしもも又また標しるしく一同どうド
 りの河か海かい深ふか川がは又また唐たう戎じゆうむすべる江えのは此こゝ奇き殊じゆ小せう力りきをつくせり
 となん一年ねん解かいに送別べつ君きみ句く又また何なにとなりく芝しば吹ふ風ふうもあ氣きあら里
 素す裳さ小せう水みづをい降ふして秋あきちかるや冬ふゆあらはや作さ者しやもあるに只
 朽くりふるの深ふかきいんといいん里或ある出でるは河か北きた後ご出でるの人ひと支し考かうと
 徳とく交かう世せ依いり一祀まつりすい大だいなる事延えんあり牧臺たいの巢刈かり集しゆ
 小せう松しょう風ふうより交考かう人ひとの文虫ちゆう何なにり雪洞どういいちい、

悪あくりも己おのれ又また世よより一危あやうはくくはいづるも我と吟一いと
 我われを慰むばりりふい法ほつ子しはあるに後ごト一取とり中にと
 進しん谷や此こゝ句く我われ清せい中ちゆうゆく有あるに後ごト一取とり中にと
 「故こ此こゝ一い編へんと述者じゆの又一い編へんの中

聖享保十八年八十餘歳一にて死せり

野坡

高たか家か野の坡のと越此こゝの人はトめ江戸と遊あそび後浪なみ越こに往
 寸すん標ひょう本ほん社しゃと号に意つ君徳とく小せう附つけ合あの作我われ依いりとるに此こゝ人ひとと
 然しかん子親おや一い係けい者しやちり一い不ふ言ごん我われ向むかひと妙めう奈なり一子こ親おや解かい
 此こゝ出で生せいぬ橋子しり一長ちやう松しょうが初の名で来津きん内ない受うけ一はき掃さう
 際さい一いて一山さん茶ちや家か小せうり一はは江えの垣高たかゆひ急いそや神去しんぐれ
 或ある夜よ盜たうその家又また悪あく入いり一被ひおま一いて一云いく我一い物ものの行く

ふし唯葉一竹こまめ一壺りや敷はむけれバ柴打焚く
 んまうく寛後すべしと塗うふづ紀なぐら彼世うち解つ
 松上り了茶房此名は我直れおてと踏出しそ我房の橋
 毛寂し腰里先と何るを忍つ事何のさうやと家ふ坡
 糸く此や一答ふた何うが今日あの存松も句作ち何ん
 和やと坡すあつち一垣階る雀交らふく香此強と塗た
 感しておゆ知けりや今人と成り扱ふるさつ此の如し
 後先此の里名を言津時小輪一旬ら言津時の子と
 祢せりや今年壽我まうら

誠智誠人

誠智誠人々尾陽渡津位す舊川の老木なり一尺海目ハさう
 い屋一夕うらみ一材若木の料里す記さる若葉ふか茶をさる

拙智らうと牡丹うか稗の穂れさうたる糸色く糸一集
 江戸ぬく生菊が句兄弟といふ出我葉一て誠人が送別
 れ句う一表こ記の公屋すはよ終世業出意といつるに「表附
 は風毛粘まはけ一の花と為しうと此人の涙中を及ばはる
 沙幕毛色を粘さる情去し一江沙の砂舞又情一信る約
 何うし何し一誓心此志と覚さうりや若紀女おどお入
 ちうし子も有し我孫も此終里何らげさる我憐く後のり
 柳中々生言りま玉の何とまふ久味を成りし我後懐て
 一若宿一思ひ切る時猫此意さるかさちりり沙毛此慍懐を
 よみしけん後の櫻集は此句成バ加入何うしとと色と君子の
 懐む取ちれど又此危し一底を記もうと一はまを此表
 端成叩く生福を知りよまを色と世人の風流さるらや

病歿して後著流の支考先妙の爰若滑靴有れ傳ふごとく妄言
 を播く生化松撰り去多くおして古式を塵一世人我欺ける
 として古了怒王不猫館とのみ去を著しく洋行し生報を弁
 せり實に我及に流切ある流潔の士とて世變のりちるべし

涼翁

涼翁と號す山田不在恒しく津管をり燕つ小柱んと乙由
 と名流等々良益友歿阿るひの神風録と号す一筆れも應乞
 乞應をり今招抄る。「淋げげく阿るおるや概名益流を
 織一難一あり一梅阿り後一橋あるが在ちり此句老成爲徒
 一犬歩れ手小阿候るる螢うか一身の上紙只去存水りりぬ存益
 包こく世室り邊に居る人と仮神一筆履を記くおて阿ら
 居人まうと存ぬ一むるに石阿とらず若を去取の益すり

直了思きく流北東山一ゆ紀生すり横州流古の橋志
 しく又うりくと終小長流海でたうりゆき一こなき室
 我我雅人と稱すべ一老後危等小たよんぐつ人松よ
 に去す里辞き被乞ふ若眼を算記て一合息去や生阿ら
 きれ子祝と云つて又操く一そ曉の生去縁居りやと再
 捕の聲咬ゆ乙由くこくお存く此語又流ぐ何のうと妙ひ
 や阿らん生流北松字に言多又味り里け延が首水争我流
 延せる時流き小息を絶た里りり一出り世る我飛つてく
 痛症を患く死せりとい病申の吟一今流て八人が居むと
 折ひひ一我身好う人おかくの仕合と生假流あるを去る
 以てつ流又備よ

曾良

首良之信所後侍の聲なり一とせ東武又遊ぐ意つ又入至
 一時小名河り「ばのくと鳥馬むや空北去」果多や野離れ
 孫山一垣百尺のはあふちふつと根亮ふふ水及尺及と河意の
 市北はま按ずるに桑の細道より別良と後城屋みく伴歩團
 長崎といふ所小ゆる里阿れは先づ内て初と存く「ゆ死くて
 たふま休ともそ秋高を又いそぐけさのそ然み孫るもの
 眼み雙を元のあて雲は海すふが如くは此河河意は洲才の
 離懐思ひ原は原一控る城或は此人北越の山中まで沙志
 案小遣ひ引列れさうそいづるのたある漢あり若縁集り
 毎城あての吟も「たがみ休て紅いほは汗拭と是等までと
 ろは志の種まうは

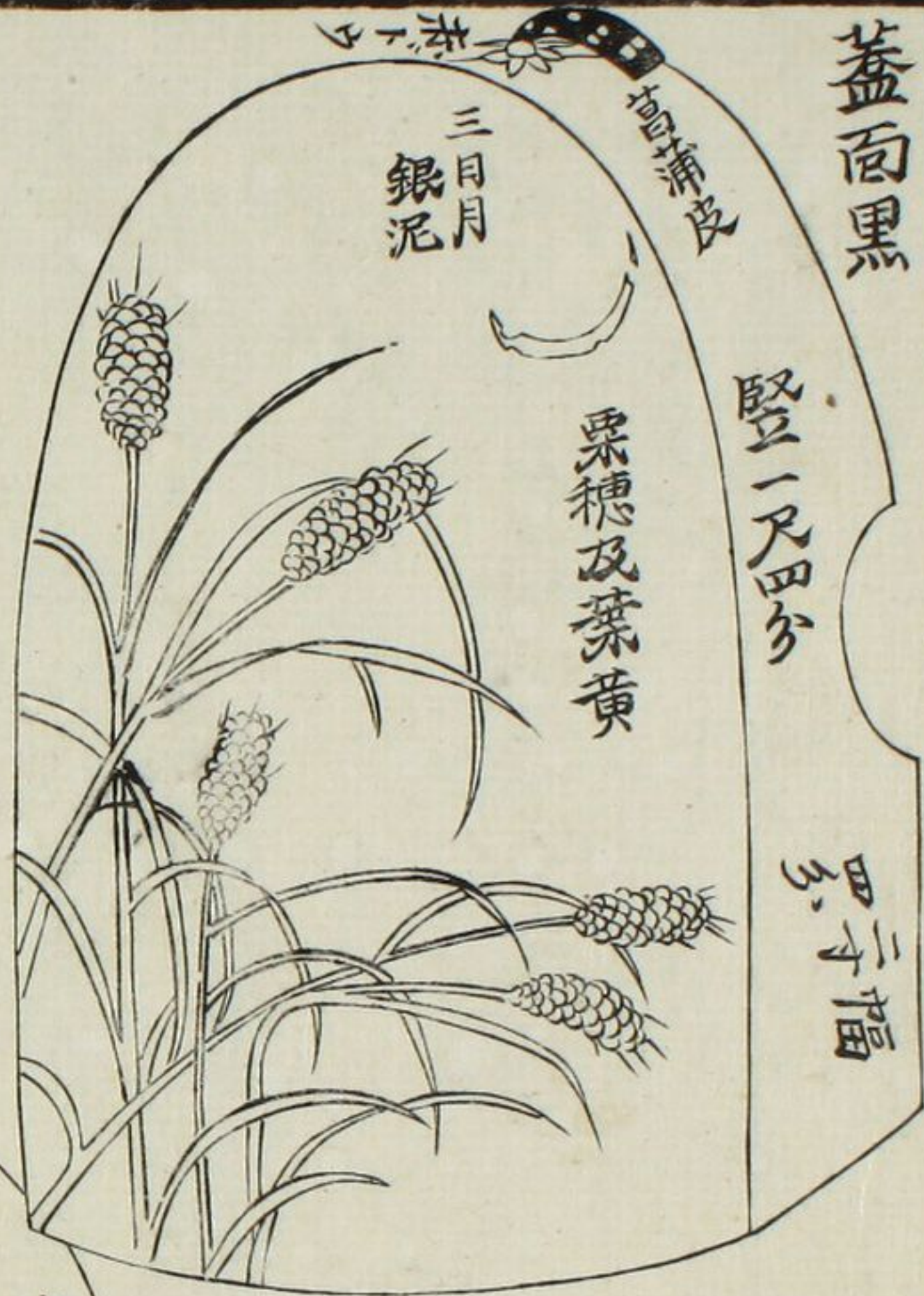
原田守古

原田氏能名守古和別郡山北重臣なり少小より経略人
 超りた小樽東歌書主人物はあひに通るる或時人々
 打家里梅の題いごとて秘教句せよと沙村材の云「此子進
 歩く」先づけの意の手柄や高き梅たど先才廣く法として
 後愛どそ意つ小入取貞享中沙村在時小控つる時その言
 に津島して一日松屋と三津北奇仙河り「まると中池魚の常は掛
 匠とあやうあるの絶も失くさるる」後胤種意の「は水バ沙才の初と厚く
 ぬ」抄ゆる集人あしく出流ありそ「い」系は水バ沙才の初と厚く
 及城思ふの志流ゆしてえ録の法逆は意つ無借れあ雷と称
 ら海沙志後にもそ追慕他小異なり海舟の築造を初りて
 こそあきて「大京め小意せは梅の意けり里津川へ居く「海」
 竹北財系や席の経纂く清々「百多を流ひく梅北案案う系
 成の「鳴千多れたあ北空騰えその超り「つむ」殺く拾ふ

蓋面黒

豎一尺四分

四寸

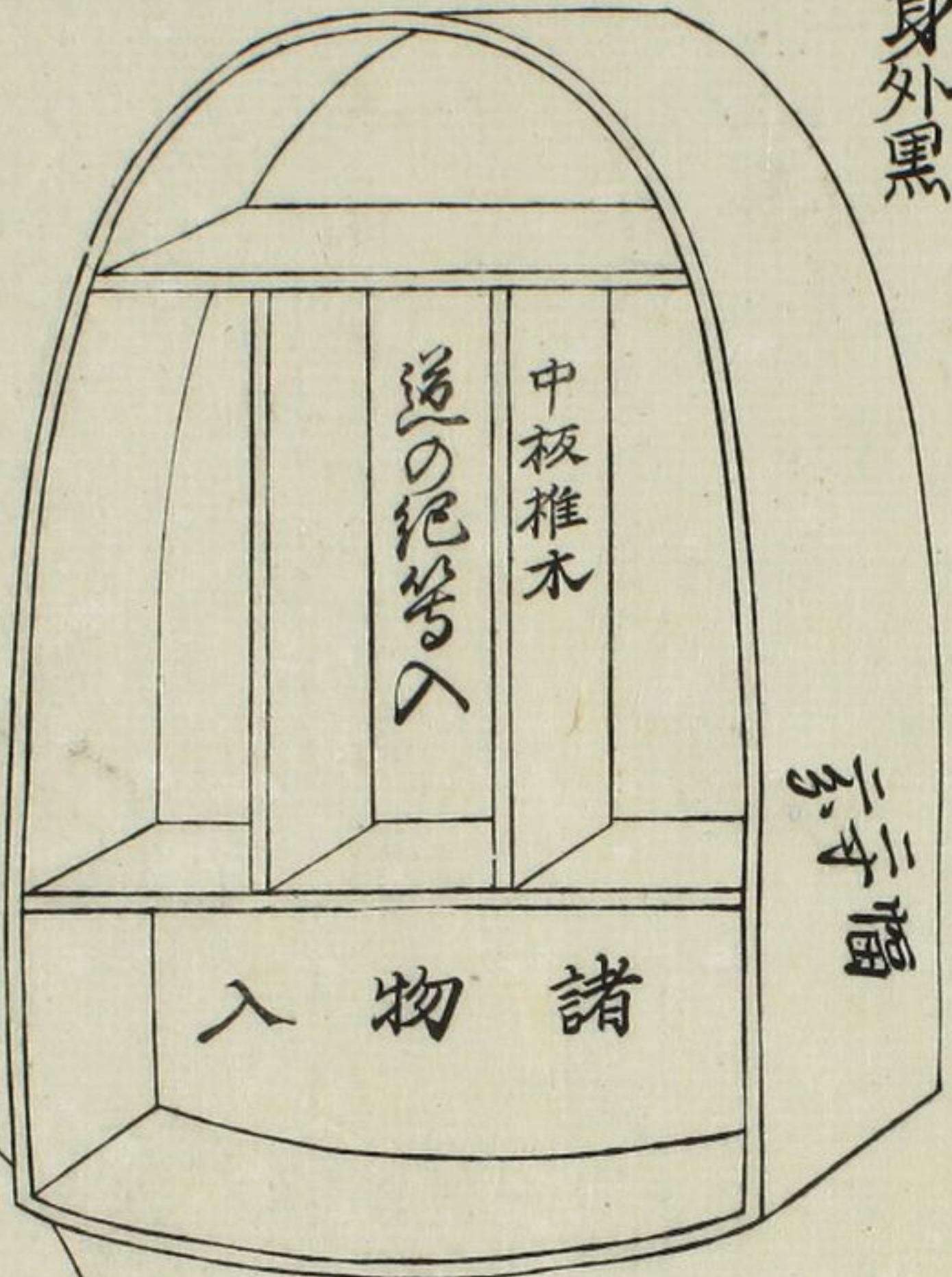


粟穂及葉黄

三月月
銀泥

件日与弟子松國有云
依之能滑于時
翁賧別錄此一物
右深秘石室云

身外黒



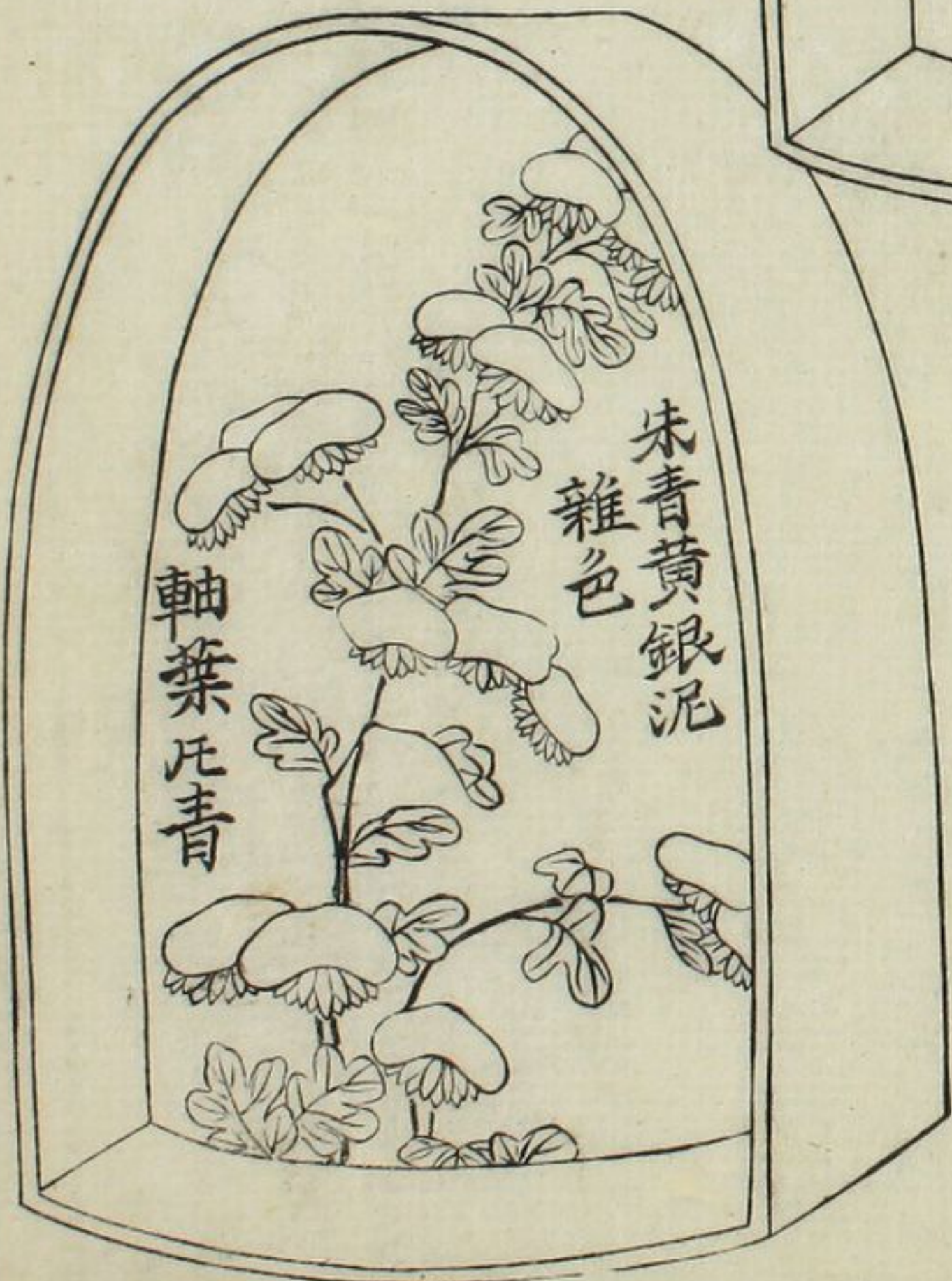
中板椎木

道の紀号入

入物諸

後有故逆為

正正康士有僕嘗行
而得摸之跡
火止之兵是為附屬



朱青黄銀泥
雜色

軸葉凡青

儀伴采人



怪物者
焉今依其家
借束之正尔

友一弟子素崇阿り之載あり

知足一家

知足之歩少海法住人慈翁と交り海一住居我叔照彦
 地蔵亭と号す一志遷く風流あり或百姓の二男三男これ
 く小仕立する後居小中出づる句「落首河梁報く」一名
 敬居系又一く風や吹社吹く素心一知足の子父此志我
 後く千手掛を著し「地蔵く一夜く」夜慈翁一傑將「松
 根小多代我阿居る時素心系知足母「里かよひいごうあや猿
 月蟻母妻「公系く」傑つこれ居雲あり傑將女妻子

山口素崇

山口氏之江戸の人為小和漢此出を嗜く待文を吾に老母
 仕く至孝あり人阿るひと妻を迎ふる成すくむるを固持

して居みぬ是祝のゆゑ遠んる我忍れたりなり等実の君子
 歎祿すく一弱冠あり季吟窓つよ遊ぐ能道此達者と海
 づる居此名を今日といひ又東雪にも素崇といふもその
 別号あり後又或主家我辞してあり深川の別荘に遊
 池成堀里交友を集く晋北意達を道社に擬せしあり能
 あり「吾ら社中と稱するは是也等又依て友里句ら吾社に
 類すは句「池小橋赤一仮名く紀碧ふ柳り友を伴み赤言尚
 茶種一年もとちや「軍方ぐれつは後河「旨す紀ぬゆや月名
 十三夜「孫多島三の岐と夜や鉢鼓舞人小橋灸せしは
 目には書禁山ほろくぎに初川河豪快おと可見享保二
 年八月七十五歳して歿せり或人慈翁は能持たりとい
 んと字小唯死せりと答られしは「さちありはまは箱と此雙此

交際おれり多し古人の風何れもいさなつり一統るに今時の
 人招り断金成とあつて文小冠髻比れ如く吳越を臨る
 援成扱する者百と有り嘆息するに餘何り

能家奇人談巻之申終

